

編集後記

◇不順な天候が続いて夏が不完全燃焼のまま通り過ぎ、秋九月。市史研究第5号をお送りします。

◇今号は前号でお知らせしたとおり内容を「武田氏特集」と致しました。NHK大河ドラマの影響もあって書店の店先には「武田氏」関係の書籍が溢れており、「市史研究」もお前もか／＼の声が聞えるかも知れませんが、少々気どって申せば醸造元が、かねてより計っていたドライを発表したつもりです。

◇本号の執筆は、武田期に係わらず他を専門とする委員にも依頼したため、論題が歴史・考古・芸術・軍学などに及び多彩な内容を盛ることができました。

執筆者各位には、いずれも「史料編」編集の合間をぬってのご執筆で大変ご苦勞をいただきました。

◇さて考古・古代・中世部会では、これま

で四度の発掘調査を実施しました。一の森経塚遺跡、上土器遺跡、川田館跡、湯村山城跡がそれで、今号には川田館跡の調査報告がなされており、躑躅が崎館移転以前の武田氏居館の位置を探るうえで貴重な報文となるでしょう。

◇こうした発掘調査では、土地所有者の快諾に加え、発掘予定地の形状の変化や表採遺物に関する情報、さらには多数の人力の提供を受ける地元の協力を得ることが不可欠であります。幸に、これまで一連の発掘調査では予期した以上の地元のご協力があった、作業は極めて順調に進みました。多くの市民皆さまの後押しを心強く感ずる次第です。

発掘調査の成果の詳細は、これから『市史研究』誌上において逐次報告されますが、主要な部分は現在編集中の「原始・古代・中世編」に収録されます。

◇近時、武田氏の研究は、「武田氏研究会」の発足などもあって活況を呈しています。当室にも時節柄、武田史跡などに関する問合

せが寄せられますが、それにも増して、史料情報や研究面での紹介が増加しており、底辺の広がりを感じさせます。「裾広くして峯高し」のたとえのようにこの機会、この分野の研究の拡がりと一緒に一層の深化が期待されます。

◇本誌の発行は通常は年一回。原稿締切りは毎年六月三〇日。今年は特集号の関係で年二回を予定し、次号（十一月発行予定）もすでに執筆原稿が出揃い、先日、市史研究編集小委員会（斎藤典男小委員長）を開いて編集作業を終えたところです。どうぞ次号もご期待ください。

「秋何ぞ軒に背て書に睡ル」 海士子

（「近世町方史料編」甲府の文芸より）

（高木）